

パスカルの『パンセ』における

「悪」 le mal の意味

森 川 甫

はじめに

「人間が人間である限り、悪を体験し、悪に苦しむ。」¹⁾ それ故、人間を描写する文学は直接に、或いは間接に、何らかの意味で悪とかかわりをもっている。パスカルの作品も同様である。「数学者としての『練習』とか、青年時代に一時、物理学に熱中したことを除くと、パスカルという人物全体が悪の問題であると云えよう。」²⁾ とのセルティヤンジュの言葉に恐らく誰しも同意するであろう。パスカルの作品の中で、とりわけ『パンセ』³⁾ は悪の問題を深く蔵している。

さて、パスカルの『パンセ』における「悪」le mal の意味を知るには、テキストに即して、その意味を求めなければならない。しかし、ここで注意すべきことは、『パンセ』が未完成の作品である点である。即ち、ペリエの証言によれば、「1人の病人が、取り逃がすおそれのあるくさぐさの思想を忘れないために、ただ自分ひとりのために書いたものであって、その後、一度も読み返したり、手を入れたりしたことの無いもの」⁴⁾ であり、「これを完成するには、なお10年の健康を必要とすると自分でもしばしば云っており」⁴⁾ また、「心に思い浮ぶがままに、小紙片に書きとめた彼の思想の最初の表現にすぎなかったので、順序もなく、脈絡もない」⁴⁾ 諸断章の集積として、残されたものであった。断章という性質から、その取扱い方によって、さまざまな解釈が可能となり、ひいては偏った解釈におちいる危険があるから、まず、『パンセ』と呼ばれる、パスカルの弁証論の意図を見極め、次に、『パンセ』において描かれている、悪に損われた人間の状態を調べた

後、『パンセ』における「悪」の意味を検討して行きたい。

パスカルが弁証論の著作を企てた意図は、キリスト教の真理を否定する人々、いいかえれば、理性を信仰に服従させることを拒むすべての無神論者や自由思想家ばかりでなく、教会に属しながら、福音の真理にしたがって自己の行為を律することをしないキリスト教徒をも論駁し、説得しようとするところにあった。そのため、彼はまず、このような人々の心に働きかけて、唯一の神に赴かせようと努力した。ここでパスカルが悩んだ点は、唯一の神を説得しようとする側に、彼らを魅きつけるだけの魅力がなかったことである。また一方、彼が驚いたことは、ベガンも指摘している如く、「人間としての尊さと喜びを与えてくれる、かの啓示された真理なしに、彼らが生きていること」⁵⁾ である。パスカルはすでに、「火、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神。哲学者および識者の神ならず。確実、確実、感情、歓喜、平和。イエス・キリストの神。(中略)彼は福音に示されたる道によりてのみ、見いださる。(中略)歓喜、歓喜、歓喜の涙。」⁶⁾ という啓示を体験していた。このような彼にとって、啓示なしに生きることは耐え難いことであり、それ故、啓示なしに生きる人々の心に働きかけざるをえなかった。彼らを観察する時の耐え難さ、また、彼らに対する憐みの気持は、『パンセ』のいたるところで見いだすことができるであろう。

パスカルはいつの時代にも見られる普遍的人間性を念頭においているが、彼が語りかける対象と

してとらえている人間は、歴史の一時期の人々である。その時代は、ルネッサンスを既に経験した時代であって、地理的世界は拡大されており、中世の思想は人々の心をとらえることができなくなっていた。このような時代の思潮と超自然的なキリスト教との対決は当時の重要な問題であった。ウィレーの言葉を借りるならば、「超自然的で詩的聖書を新しい世界像にどのように適合させるか、エホバと本体論的に証明されたデカルトの『神』とをどのように調和させるか、また奇蹟をもとにしたキリスト教の全構造と新しい『哲学的』原理をどのように調和させるか、これが時代の批判的知性にとって主要な問題」⁷⁾だったのである。パスカルはこのように中世とは質的に異った時代に生き、「実証科学がその基礎を確かなものにし、宇宙観を新たにしていた17世紀前半において、科学的方法を確立した人々の中で第1人物であった。」⁸⁾

このパスカルが対象としている人々は、独断論者と懐疑論者の2つのタイプに分類できる。『ド・サシ氏との対話』において、パスカルは独断論者をエピクテトスの中に見出し、「精神と意志の能力が自由であり、それら2つの能力によってわれわれは自分を完全なものにできる。そして人間は、これらの能力によって完全に神を愛し、神に従い、神の意に適い、おのれのすべての悪徳より癒され、すべての徳をおさめ、こうして聖者となり神の伴侶となるのである。」⁹⁾とエピクテトスの考えを示している。また、懐疑論者をモンテーニュにおいてとらえ、「全般的な普遍的懐疑のうちにすべてのものを置く。換言すれば自分が疑っているかを疑い、更にまたこの最後の仮定までも疑うので、彼の不確かさは休むことも終ることも知らぬ円となって自分自身の上を回転し、すべてが不確かであると確言する人々に対しても、すべてが不確かな訳ではないと確言する人々に対しても同じように反対する。何故ならば、彼は何事も確言したくないからである。」¹⁰⁾とモンテーニュの考えを要約している。パスカルはこのような独断論者と懐疑論者をそれぞれ、その眠りから覚し、彼らの生き方を反省させ、福音へと向かわせるためアポロジを執筆したのであった。

パスカルが書こうとしたことは、科学の進歩によってもすべての秩序が改変されることはなく、人間の状態は依然として不変であり、理性によっていくら努力しても真理に至りえないのであり、真理は理性と異った他の秩序にあるということである。アポロジのこの「企てにはいるために、彼はまず人間の描写から始め、(中略)人間の偉大さと下劣さ、人間の長所と欠点、人間に残されている僅かばかりの光と、ほとんどあらゆる方面で人間をとりまいて暗黒、そして最後に、人間の本性のうちに見いだされるすべての驚くべき相反など」¹¹⁾を描いた。この描写のためパスカルはさまざまなテクニクを用いており、必要とする場合には彼自身の声を敵手に借して反対させている。ルシエン・ジェルファニョンも指摘している如く、「『パンセ』にはあらゆるものが、つまり、反省も演繹も帰納も模倣も自然な対話も雄弁も、なおとりわけ、熱情と生命があると云えよう。」¹²⁾このようにいろいろな手段を用いているのは、敵手を「ひきいれたかったからである。」¹²⁾パスカルにとって重要なことは、人間の限界、無能力を示して、イエス・キリストに導かれて神のみに読者をつれてゆくことであった。読者を導き、説得しようとするとき、彼は事実を尊重する。ここに物理学者としてのパスカルの姿が現われている。単なる観念的証明は彼にとって無効であった。彼の主張する人間の状態は人間的事実からひきだされたものであり、また聖書記事も歴史的事実とみなしていた。前者の人間的事実の中に人間の悲惨を示す多くの事実が見出される。しかし、その悲惨な事実の中であって否定することのできない偉大さがきらめく。このことから、人間の現在の状態が本来あるべき状態ではないことを感得させ、悪が入ってきたことに思いを至らせるのである。この悪を認め、信仰が加わるとき、人間的事実の事実と啓示としての聖書的事実が神秘的に結びついてくる。パスカルはこの結びつきを読者に認めさせようとするのである。以上の如く、パスカルが意図したのはキリスト教のアポロジである。このパスカルの意図を念頭において、悪に損われた人間の状態がどのように示されているかを探ろう。

二

さて、パスカルは『パンセ』において悪のもたらす人間のさまざまな状態をどのように描いているであろうか。「人間の状態。気まぐれ、倦怠、不安。」(B. 127, L. 61)¹³⁾パスカルはこの断章を余りにも確信をもちすぎて、現在の状態に安住している人々に示している。「私は私を無であると思うべきか。私は私を神と思うべきか。」(B. 227 L. 25) 何故、このような極端な問を発するのであろうか。人間の中に二つの相対立する命題、すなわち、悲慘と偉大があるからである。

パスカルは人間の状態が悪によって損われて悲慘にみちていることを示して、相手を途方にくらせようとする。まず、空間において人間はいかなる状態にあるか。「自然の広大なるふところにおいては、眼にもとまらぬほどの一つの線にすぎない」(B. 72, L. 390) 地球上で「さ迷っており、」(B. 72, L. 390)「人間を知りもせず、またその人間が知りもしない無限の空間の中に沈んでいる。」(B. 205, L. 116) この世界では人間は「いわば宇宙のこの一隅に迷いこんだように、誰が自分をそこに置いたのか、自分が何をしにそこに来たのか知らない」(B. 693, L. 389)のである。

それでは時間においては人間はいかなる状態にあるか。人間はほんのつかの間の存在にすぎない。「この世の生の時間は一瞬にすぎず、」(B. 195, L. 12) その「短い一生の期間がその前と後につづく永遠のうちに没し去っている。」(B. 205, L. 116) その永遠よりみれば、この一生は「空しくそして惨めである。」(B. 149, L. 68) この惨めさは「人間の寿命が何故千年でなくて百年に限られているのか」(B. 208, L. 385)を反省すればうかがえよう。空しさは恋愛の原因と結果をみれば明瞭である。「その原因は『何だか私にはわからないもの』(コルネイユ)であり、またその結果は恐るべきものである。」(B. 162, L. 90)

空間においてさ迷い、時間において空しく、惨めな人間は「些細なことに悩まされる。」(B. 136, L. 80) 何故なら、われわれの想像力がわれわれ

の煩悶を現にあるもの以上にするからである。(B. 109, L. 144) その上、人間はこの現在の自分の状態をそのまま認めることを拒む。「われわれは、自己においてまた自己自身の存在においてわれわれがもっている生活に、満足しない。われわれは、他人の観念のなかで一つの架空な生活をいとなもうと欲し、そのために見栄をはろうとする。われわれは、たえずわれわれの架空な存在を飾り、それを維持しようとして、自己の真の存在をなおざりにする。」(B. 147, L. 169) このような状態にあって、「現在はわれわれを満足させてくれない。」(B. 425, L. 300)そして実際には、「われわれは決して生きているのではなくて、生きることを望んでいるのである。われわれは幸福でありたいとつねに心がけていながら、とうてい幸福になりえないのは避けがたいことである。」(B. 172, L. 84)

人間は真理と善を求めようとするが、「真理についても、善についても無力である。」(B. 436, L. 65)「真をも、善をも、部分的にしかもたず、しかも悪や偽をまじえた状態でしか、真や善をもつことができない」(B. 385, L. 298) ことを人間は経験によって知っている。われわれの知り得る事柄は余りにも限られている。「われわれの感覚は、極端なものを受けつけない。あまりにも大きい音はわれわれをつんばにする。あまりにも強い光は眼をくらませる。あまり離しても、あまり近づけても、物は見えない、あまり長くても、あまり短かくても、話はわからなくなる。あまりに真実なことは、われわれを当惑させる。」(B. 72, L. 390) しかも、「病気がわれわれの判断や感覚を損う。」(B. 82, L. 81) それだけではなく、「われわれ自身の利害というものも、またわれわれの眼を快くえぐる不思議な道具である。」(B. 82, L. 81)「真理と正義はきわめて微細な2つの尖端であって、われわれの道具はそれにびったり触れるにはあまりに磨滅しすぎている。かりに届いたとしても、尖端をつぶして、そのまわりに真よりもむしろ偽にぶつかる。」(B. 82, L. 81)

人間は真や善を知り得ないだけでなく、自分自身を理解しようとしてもなし得ない。「人間は、彼自身にとっても、自然のなかでの最も不思議な

対象である。何故なら、人間は身体が何であるかを考えることができない。同様に、精神が何であるかを考えることもできない。まして、身体がいかにして精神と一つに結ばれうるかというようなことは、とうてい理解することができない。そこに彼の困難の頂点がある。しかし、それこそまさに、彼自身の存在である。」(B. 72, L. 390) 根底において、人間は悪と誤謬に満ちており、一方でわれわれの認識能力が真理をとらえようとしても、他方ではわれわれは真理から遠ざかる。何故なら真理がわれわれを苦しめるからであり、われわれが真理をとらえ得ないのは真理への憎悪があるからである。何故、真理が人間を苦しめるのか。「彼は、彼を責め彼の欠陥を自覚させるこの真理に対して、徹底的な憎しみをいだくからである。彼はこの真理を根絶したいと思うが、真理をそれ自身において破壊することができないので、せめて自分の意識や他人の意識のなかで、できるだけそれを破壊する。いいかえれば、彼は自己の欠陥を、他人の眼からも自己の眼からも隠すことに心をくだく。人がそれを自分の前で指摘したり、それを他人に見られることに、彼は耐えられない。」(B. 100, L. 99) 一方で真理を求めているかと思うと、他方では真理を憎悪しているこの人間の生活は、矛盾を糸としておりなす織物のようである。「人間は生来、信じやすく疑いぶかく、臆病であって大胆である。」(B. 125, L. 239)

悪がもたらす人間の悲慘の極致は死である。「人間の所有する一切のものが流れ去るのを感じるのは、恐しいことである。」(B. 212, L. 152)「劇の他の場面はいかに美しくても、最後の場面は血なまぐさい。ついには頭から土をかぶせられる。それで永遠におしまいである。」(B. 210, L. 341)そして、「われわれを瞬間ごとに脅やかしている死は、遠からずして、永遠の滅亡または永遠の不幸という恐るべき必然性のなかに、いや応なしにわれわれを投げこむであろうということを理解するには、さして高貴な魂であることを必要としない。死ほど現実的で、死ほど恐しいことはない。好きなだけ強がってみせるがいい。死がこの世で最も美しい生涯を待ちうけている終末である。」(B. 194, L. 11)

しかし問題を奇妙に複雑にさせるものがある。それはこの悲慘な状態のなかに何か光輝く偉大さがあることである。この偉大さが人間を一層理解し難いものになっている。人間の偉大さのなかで第一で最大のものは思惟であり、これによって人間は宇宙の他のすべてと区別されている。「人間は自然のうちで最も弱い一莖の葦にすぎない。しかしそれは考える葦である。これをおしつぶすのには、宇宙全体は何も武装する必要はない。風のひと吹き、水のひと滴も、これを殺すに十分である。しかし宇宙がこれをおしつぶすときも、人間は、人間を殺すものよりも一そう高貴であるであろう。なぜなら、人間は、自分が死ぬことを知っており、宇宙が人間の上に優越することを知っているからである。宇宙はそれについて何も知らない。」(B. 347, L. 391) 逆説的に云えば、「人間の偉大は、人間が自己の悲慘なことを知っている点において偉大である。樹木は自己の悲慘なことを知らない。」(B. 397, L. 218) 動物もまた樹木と同様である。何故なら、苦痛を耐えているとしても、それを経験している自己をとらえていない。「人間は自己の悲慘であることを知っている。それゆえ、彼は悲慘である。何故なら、彼は事実、悲慘だからである。だが、人間はまさに偉大である。なぜなら、彼は自己の悲慘であることを知っているからである。」(B. 416, L. 237) 人間はこの宇宙において、自己の悲慘を知り得る特権をもった唯一の存在である。偉大と悲慘。この相容れない二つの現実が人間を不可解なものにしているのである。それ故、次のごとく問うことができる。「人間はそもそもの怪物であろうか。」(B. 434, L. 246)「何という奇妙、何という怪異、何という渾沌、何という矛盾にみちたもの、何という驚異であることか!」(B. 434, L. 246) 何故なら、彼は全く「宇宙の光榮にして、宇宙の屑」(B. 434, L. 246) だからである。このように、人間は偉大と悲慘との奇妙に混合した存在なのである。

人間のうちにあるこの悲慘と偉大は、彼の現在の状態が真のものでないことを示しているとパスカルは云う。人間の本性が彼をあらゆる状態においてつねに不幸にしているということが理解され

るのは、その本性の墮落が示される時である。人間のうちには本性の墮落を示す、ある裂け目があった。根源的な悪が人間の歴史のなかに侵入してきたので、人間が「創造の状態」ににいるということは、考えることのできないことであった。

明らかに人間は、以前彼のものであり、今はそこから追放されている地位を、悩みつつ求めている。「人間が迷っているということ、その本来の場所から落ちているということ、不安にかられてその場所を求めているということ、それをふたたび見いだすことができずにいるということ、誰かさとらぬ者があろうか。」(B. 431, L. 394) 何故、このように云うことができるのであろうか。人間にはかつての状態を失ったことを苦しむだけの光が残されているからである。それ故、彼は悲惨であるが、「それは王侯の悲惨であり、位を奪われた国王の悲惨である。」(B. 398, L. 220)

人間はかつて彼のものであった幸福を求める。「すべての人間は幸福になることを求めている。このことには例外がない。そのために用いる手段がいかに異なろうとも、彼らはみなこの目的に向っている。」(B. 425, L. 300) 今、人間にあるのは幸福のしるしと幸福を空しく欲することである。人間は幸福を求めるけれども、不幸から不幸へと導かれて、ついに不幸の頂点としての死に至るのである。このことに対して、哲学者は全く無力であるという。「人間よ、汝の悲惨をいやす薬を、汝自身のうちに求めるのは、むだである。汝のもつあらゆる光は、汝自身のうちには真理も善も見いだされないことを、教えるだけがやつのことである。哲学者たちはそれを汝に約束したが、彼らはそれを果すことができなかった。彼らは汝の真の善が何であるか、汝の真の状態が何であるかを知らない。汝の悪をいやす薬を知りもしないくせに、彼らはどうしてそれを与えることができようか？」(B. 430, L. 309) 彼が念頭においた第一の哲学者は同時代のデカルトであったが、彼を批評して、「無用にして不確実なデカルト。」(B. 78, L. 297) と云っている。ここでパスカルが挙げようとしている宗教はキリスト教である。真の宗教であるためには人間の本性を、その偉大と悲惨にまで至って知っていなければならな

い。「キリスト教以外に、いかなる宗教がそれを知っていようか。」(B. 433, L. 409) と彼は云う。

以上の如く、人間は悪によって損われ、悲惨な状態にあるが、本来、悪だったのではない。今も偉大さをもっている。これは、真理や善を求めることのできた創造の状態から、根源的悪である原罪によって墮落の状態におちたためである。以上が、パスカルの述べる悪によって損われた人間の状態である。

三

さて、パスカルは悪の意味をどのようにとらえているであろうか。彼のとらえ方は合理主義者、無神論的であれ、神学的であれ、合理主義者のとらえ方とは全く異っている。合理主義者はあらゆることに対して質問を發し、そして最後に何らかの解答を持出してくる。しかし、そのような解答はパスカルにとっては「一時間の労にさえ値しない」(B. 79, L. 174) ものなのである。ではパスカルは悪をどのようにとらえるであろうか。

パスカルにとっては、悪のような人間の状態に関する問題は、幾何学的精神が扱う物理的或いは化学的問題とは全く異った秩序に属している。後者においては、合理的解答がえられるが、前者は合理的に説明されるような問題ではない。

パスカルとは反対に、17世紀の多くの人々は、悪を合理的問題として扱い、しばしば質問を發した。そのような質問に関して、ジュリアン・エイマール・ダンジェは次のように指摘している。「17世紀では、このわずらわしい問題が最大のものではなかったにしても、しばしば中心的問題となって現われた。(中略) ル・ペ・イヴ・ド・パリは自由思想家のもっている多くの反対論を提示している。即ち、法律がしばしば不正であること、子供たちが親の過失のために罰せられていること、国民が王の過失のために罰せられていること、有徳の人が必ずしも名誉と富を与えられていないこと、善良な人々がこの世では苦しんでいること、……」¹⁴⁾ フィヨー・ド・ラ・シェーズも『パスカル氏のパンセに関する講話』の中で「異教徒の最も秀れた精神の持主を悩ました不可解な

問題」¹⁵⁾を示している。即ち、「何故、殆んど常に邪惡な人々が成功し、正しく見える人々が惨めで弱々しいのか。何故、貧しい人々と富裕な人々、健康な人々と病める人々、暴君と虐げられた人々がこの世で共に住んでいるのか。何故、かくも多くの誤謬、意見、風習、習慣、宗教が存在することを神は許しているのか。」¹⁶⁾

これらの質問に対して、当時のキリスト教護教家たちは何らかの解答を用意している。護教家たちの態度をジュリアン・エイマール・ダンジェは次のように指摘している。「肉体的な、或いは精神的な惡に関する摂理を正当化しようとして、護教家たちはこの点について殆んど皆、モリニストなので、大した困難には遭遇していない。つまり、惡は宇宙の秩序によって説明されている。人間は天上に幸福をもち、罪に関しては人間のみがその責任を負う。神は過失の資料となる行為を準備するが、違反に必須である罪への同意はしない。」¹⁷⁾惡の問題を合理的に説明しようとしたのは、上述のような護教家だけでなく、ユマニストたちも同様である。「原罪を説明するため、すべての人々、ユマニストでさえ、神学的二元論を人間のうちに認めることに同意する。つまり、善と惡のこの恐い混合はわれわれの始祖の過失によってのみ説明されうる。それは合理的になされる。」¹⁸⁾結局、質問に対して、何らかの解答を持出し、大氣の圧力や算術三角形等の幾何学的精神の領域の問題を扱うのと同じ態度をとっている。

パスカルは惡を上記の護教家やユマニストの如くには扱わない。通常の思考方法によっては、この問題をとらえていない。「われわれはアダムの栄光の状態をも、彼の罪の性質をも、その罪がわれわれに遺伝したことをも、理解することができない。それらのことは、われわれの場合と全く異った種類の状態において起ったことであり、われわれの現在の理解力の状態を超えていることである。」(B. 560, L. 14) 人間の状態に関しては、パスカルは現実から観念へ、事実から理論へと思考をすすめる習慣を捨てたのである。人間の状態は、通常の思考方法が用いられる秩序とは異なる、別の秩序に属しているのである。そしてこの秩序

においては、哲学者たちの観念に関する自由裁量権はその効力を失ってしまっている。人間の状態を述べるとき、パスカルの関心は論理の展開や観念にあるのではなく、事実そのものに、現実の状況にある。

それ故、彼は『パンセ』において、惡の観念と神の観念を思弁的に対立させてはいない。彼が描きだそうとしているのは一つの世界、人間が日々、体験している生きた世界である。この世界に注目するならば、そこには惡と悲慘がみちているにもかかわらず、何か光輝くものがあり、この光輝くものは、人間の中に創造の状態の名残りである、否定し難い高貴さがあることを示している。つまり、パスカルにとっては、人間は高貴な創造の状態から追放された存在である。創造の状態から墮落の状態へ人間がおちた原因として介在するのが惡であり、この惡はキリスト教の用語に従うならば、「原罪」である。パスカルは人間の悲慘な状態を、この原罪の教理を用いて説明することによって、あらゆる議論を閉じさせる役割をこの原罪に、合理的に演じさせようとしているのではない。原罪を説く護教家たちは原罪を持出すことによって、人間の現実の姿を合理的に説明できると思っていた。しかし、実際はこの原罪が神秘の世界からおちて、観念的な問題となり下っていた。パスカルの独自性は、17世紀の護教家たちがこの神秘を合理化しようとしたのに反して、この神秘を決して合理的なものにしようとは試みなかった点にある。ジュリアン・エイマール・ダンジェは人間の偉大と悲慘という同じ問題について当時の護教家の1人、ジャン・バチスト・モランとパスカルの比較を試み、前者が原罪を用いて、人間の状態を合理的に説明しようとしていることを指摘している。¹⁹⁾

それではパスカルにとって原罪はいかなるものであろうか。彼にとって原罪は、上述のように人間の不可思議な状態を合理的に、一挙に解決する手段ではなかった。それ故、次のようなジュルネのパスカル解釈は誤っていると云わねばならない。「パスカルは専ら、理性によって次の点を証明しようとする。即ち、人間につきまといっている不思議な謎は人類の最初の破局を仮定することを

認めるだけで、突然、驚く程、理解しやすくなるという点である。』²⁰⁾ パスカルの主張は ジュルネの説くところと全く異なる。彼は原罪を不信者に説明するどころか、反対に彼らをこの原罪の神秘さの中に飛び込ませ、この原罪を理解し難くさせ、そして、原罪の教理の不合理さを最大限に際立たせている。パスカルは、彼のこのような考えが漠然としていると云って反対する者には、更に一層理解し難いものとして示している。即ち、この原罪の教理は愚かであり、理由のない教理だとしている。「原罪は、人間の眼から見れば、愚かなものである。しかしそれは、そのようなものとして与えられている。読者は、この教理が欠けていると云って、私を責めてはならない。というのも、私はそれを、理由なしに存在するものとして与えているからである。」(B. 445, L. 323) パスカルは原罪を神秘の次元において明らかにしているのである。このように原罪を認めることは救世主に向って第一歩をふみだすことになるであろう。

む す び

パスカルにとっては、悪は知的に理解されるものではないし、抽象化されたものでもない。悪は原罪でもあるが、更に具体的に云うならば、悲惨と偉大のおりなす人間生活を最後まで生き抜き、人間に罪からの救いの可能性を与えるために、「十字架によって敵を破滅させた」十字架上のイエス・キリストである。イエスは神の子でありながら、人間性をもって来臨し、けがれなき肉体に人間の罪を負い、悪の重さを身に罰としてうけ、「十字架の死に至るまで辱められた神」(B. 765, L. 448)であった。自らを犠牲にした後、「人間の自由の代価と勝利の永遠の戦利品」²¹⁾としての傷痕をもって神の右の座に上った。それ故、人間

の悪が解決されるのは、イエス・キリストによってであり、このキリストなくしては何の光もありえない。パスカルにとっては、人間の悪はイエス・キリストをよそにしては考えることのできない問題なのである。

註

- 1) Etienne Borne, *Le problème du mal*, p. 7.
- 2) R. P. Sertillanges, *Le problème du mal. L'histoire*, p. 210.
- 3) Blaise Pascal, *Pensées*. 『パンセ』のテキストとしては、*Pensées et Opuscules* (Brunschvicg, Hachette), *Pensées* (Lafuma, Delmas), *Pensées, Textes, Notes, Document* の三冊本 (Lafuma, Edition du Luxembourg), *Œuvres Complètes* (Chevalier, Bibliothèque de la Pléiade), 『パスカル全集』(人文書院)を使用した。
- 4) Etienne Périer, *Préface de L'édition de Port-Royal*, Lafuma, *Pensées, Documents*, p. 139.
- 5) Albert Béguin, *Pascal par lui-même*, p. 46.
- 6) *Le Mémorial*, Bibliothèque de la Pléiade (以下 Pl. とする) p. 554.
- 7) Basil Willy, *The Seventeenth Century Background*, p. 57. 邦訳、深瀬寛訳『17世紀の思想的風土』p. 69.
- 8) Daniel-Rops, *Pascal et notre coeur*, p. 57.
- 9) *Entretien avec M. de Saci sur Epictète et Montaigne*, Pl., p. 563.
- 10) *Ibid.*, p. 564.
- 11) Lafuma, *op. cit.* pp. 134—135.
- 12) Lucien Jerphagnon, *Pascal et la souffrance*, p. 116.
- 13) B. は Brunschvicg 版, L. は Lafuma 版 (Delmas) の略字記号。
- 14) Julien-Eymard d'Angers, *Pascal et ses précurseurs*, pp. 185—186.
- 15) *Le discours sur les Pensées de M. Pascal de Filteau de la Chaise*, Lafuma, *Pensées, Document*, p. 97.
- 16) *Ibid.* p. 98.
- 17) J-E d'Angers, *op. cit.*, p. 186.
- 18) J-E d'Angers, *op. cit.*, p. 224.
- 19) J-E d'Angers, *op. cit.*, pp. 188—190.
- 20) Ch. Journet, *Vérité de Pascal*, p. 129.
- 21) *Abrégé de la vie de Jésus-Christ*, Pl., p. 653.